



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オーストラリアのポストコロニアル文学 : 先住民と非先住民の「和解」をめぐる
Author(s)	一谷, 智子
Relation	多文化世界におけるアイデンティティと文化的アイコン : 民族・言語・国民を中心に Identity and Cultural Icons in a Multicultural World : Ethnicity, language, nation
Issue Date	2020-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77229
Type	journal article
File Information	1.pdf



オーストラリアのポストコロニアル文学 — 先住民と非先住民の「和解」をめぐる

一谷 智子（西南学院大学）

Writing Postcolonial Australia: Reconciliation between Indigenous and non-Indigenous Australians after the Bicentenary

Tomoko ICHITANI (Seinan Gakuin University)

<SUMMARY>

The British colonization of Australia created confrontation and conflict between Indigenous people and settlers with Indigenous people increasingly marginalized and eliminated. When Australia celebrated the bicentenary of its national foundation in 1988, it also became an opportunity to highlight the racism and colonialism within the country's past. In this respect, the bicentenary served as a turning point for reconsidering Australian history as Indigenous activists protested British settlement and invasion.

The landscape of Australian literature was also altered in 1988. Over the last three decades, which can be termed the "period of reconciliation," literary works that affirmed Indigenous rights and tackled colonial history appeared and the writings of both Indigenous and non-Indigenous authors began to resonate with each other around these issues. This paper explores the trajectory of Australian literature over the last thirty years and elaborates on the ways in which postcolonial literature has played a role in the reconciliation between Indigenous and non-Indigenous Australians.

はじめに

2018 年という年は、オーストラリアという国家の成り立ち、とりわけ植民地主義や人種主義と結びついた歴史の功罪について様々な反響を呼んだ入植 200 周年から 30 年という節目の年にあたる。1788 年以来、オーストラリアがイギリスによって植民地化される過程において、先住民と入植者の間に対立が生じ、入植者が主流となる社会が形成されるに従って、先住民は排除され周辺化されていった。¹オーストラリアにおいて、こうした植民地化の歴史が相対化され始めるのは、1988 年の入植 200 周年を迎える頃である。イギリスによる入植 200 周年の祝賀に沸いた 1988 年は、国をあげての記念行事が執り行われる一方で、「入植」を「侵略」と捉える先住民活動家らの抗議運動が展開され、国家の歴史に再解釈を促す機会ともなった。植民地化の是非をめぐる議論が高まるなかで、先住民と非先住民の「和解」が国家的、社会的な課題となる気運が生まれたこの年は、オーストラリア文学にとっても、その景色を大きく変えるターニングポイントであっ

¹ オーストラリアの先住民族は、「アボリジニ（アボリジナル）」と「トレス海峡諸島民」からなり、前者はオーストラリア大陸全土に、後者はオーストラリアの北端とパプアニューギニアの間の島々に居住している。本稿において、「先住民」というとき、主にアボリジナルの人々をさすものとする。

たといえるだろう。「和解」の時代ともいえるこの30年間は、先住民問題への解決を見出そうとする姿勢を示す作品が数多く登場した時代であり、先住民と入植者との衝突、相克、そして歩み寄りの軌跡が見られる。先住民側と主流社会側の両者の語りは、混じり合い、重なり合い、反発、共鳴しながら社会に影響を与えてきた。本稿では、そのような先住民問題への文学的アプローチが両者の「和解」の促進にどのような役割を担っているのかをいくつかの例を取り上げながら論じる。

1. 1988年以降の先住民文学をめぐる変化と自伝的作品の興隆

オーストラリアの先住民文学は、太古の昔より世代から世代へと語り継がれてきた先住民の世界観であり彼らの存在の根源を語る「ドリーミング」の物語を含めれば、悠久の歴史をもつ。「ドリーミング」の物語を伝える口承伝承の伝統は、現在においても詩や演劇、小説や映画などの文学・芸術の担い手らによって引き継がれている。しかし、1788年以降の植民地化を境として大きく異なるのは、政府による同化政策の進行とともに、声の文化が文字文化へと移植され、英語を用いた創作が行われるようになったことであろう。1960年代以降、公民権や土地権をめぐる政治運動と連動しながら、詩、小説、演劇など様々なジャンルで英語による作品が書かれた。このような政治性を孕む「活動家文学」としての先住民文学において、大きなテーマとなってくるのが「先住民性 (Aboriginality)」の問題である。先住民作家で批評家のアニタ・ヘイス(Anita Heiss)が指摘するように、イギリスによる侵略以前、オーストラリアには「アボリジニは存在しなかった」²。存在したのは、家族や土地とのつながり、言語集団によって自らを認識していた人々であり、「アボリジニ」という呼称は、入植者が「先住の民」を意味するラテン語を用いて、「盗んだ」土地の人間を呼んだことに由来する。この侵略の時以来、入植者による「先住民性」という概念とその定義は、先住民の抑圧と同化のために繰り返し用いられてきた。しかし、先住民の活動家たちは、支配者によって強要された「先住民性」の概念を再構築し、それを自らの主体性を確立する手段として用いるようになった。こうした文脈において、先住民作家にとって文学は、「自分たちのアイデンティティに対する権利を守る道具」となってきたのである。³

しかし、先住民の自己決定による「先住民性」の定義も、さまざまな論争を呼んできた。一例をあげるなら、1987年に出版されたサリー・モーガンの自伝的作品『マイ・プレイス』(My Place)がある。⁴『マイ・プレイス』は、「インド人」といわれて育てられた作者が、自らのルーツをたどり、先住民の血が流れていることを知る過程に、それまで先住民であることを認めようとしなかった母や祖母が先住民としてのアイデンティティを回復してゆく物語が並置された、まさに「先住民性」探究の物語であるといえる。本作はベストセラーとなり、先住民文学を周縁から主流へと押し上げた記念碑的な作品とされる。しかし、モーガンの「先住民性」は異なる部族の枠を超

² Heiss, Anita. "Writing Aboriginality: Authors on "Being Aboriginal"", Birns Nicholas and Rebecca McNeer, eds., *A Companion to Australian Literature since 1900*, Camden House, 2007, p.41.

³ Heiss, "Writing Aboriginality: Authors on "Being Aboriginal"", p.41.

⁴ Morgan, Sally. *My Place*, Fremantle Arts Centre Press, 1987. (邦訳 加藤めぐみ『マイ・プレイス』サイマル出版会、1992年)。

えて共同体を志向していた従来のそれとは異なるとして、先住民側からの批判の声が上がった。先住民性をめぐる問題は、長い間先住民文学の中心的課題となってきたが、例えば、スチュアート・ホール (Stuart Hall) らによって提唱された、アイデンティティを固定的なものではなく、「言説」における「主体の位置」によって構築されるものと捉える見方が浸透し始めると、先住民文学の関心も、民族運動が目指した本質的なものから、さまざまに異なる多様な経験や先住民として生きることの複雑性を表現することへと移行していった。⁵

『マイ・ブレイス』以降、1990年代の先住民文学においては、「ライフ・ライティング」もしくは「ライフ・ストーリー」と呼ばれる自伝的作品の出版が相次ぎ、先住民の子どもたちの強制隔離と同化政策による「盗まれた世代 (Stolen Generation)」⁶の経験を描いた作品が増えた。グレンニス・ワード (Glenyse Ward) の『さまよえる少女』 (*Wondering Girl*, 1988)⁷、アリス・ナンプ (Alice Nannup) の『ペリカンが笑うとき』 (*When the Pelican Laughed*, 1992)⁸、エヴェリン・クロフォード (Evelyn Crawford) の『人生行路を往きて』 (*Over My Tracks*, 1993)⁹、リタ・ハギンスとジャッキー・ハギンス (Rita Huggins and Jackie Huggins) による『リタおばさん』 (*Auntie Rita*, 1994)¹⁰、ドリス・ピルキンガトン (Doris Pilkington) の『兎よけフェンスを辿って』 (*Follow the Rabbit-Proof Fence*, 1995)¹¹など、実に多くの先住民による自伝的作品が出版された。¹²これらの作品は、共通して先住民の子どもたちの強制隔離と同化政策、すなわち「盗まれた世代」の経験を描いたものであり、その事実について無知であった一般のオーストラリア人にも、この問題について目を向けるきっかけをもたらした。1997年、ポール・キーティング労働党政権下では、人権機会平等委員会によって、この「盗まれた世代」への調査と、その報告書 *Bringing Them Home* が発行され、2008年にはケヴィン・ラッド首相による謝罪が実現したが、この一連の流れを生み出す言説の創出に、こうした自伝的作品が大きな影響を与えたと考えられる。

⁵ 例えば Hall, Stuart, and Paul Du Gay, 1996, *Questions of Cultural Identity*, Sage を参照のこと。

⁶ 「盗まれた世代」とは、1910年から1970年にかけて、オーストラリア政府によって、強制的に親から引き離されたアボリジニおよびトレス諸島民の混血の子どもたちのことをさす。

⁷ Ward, Glenyse. *Wondering Girl*, Magabala Books, 1988.

⁸ Nannup, Alice with Stephen Kinnane and Lauren March. *When the Pelican Laughed*, Freemantle Arts Centre Press, 1992.

⁹ Crawford, Evelyn. *Over My Tracks: A Remarkable Life as Told to Chris Walsh*, Penguin, 1993.

¹⁰ Huggins, Jackie and Rita Huggins. *Antie Rita*, Aboriginal Studies Press, 1994.

¹¹ Pilkington, Doris. *Follow the Rabbit-Proof Fence*, University of Queensland Press, 1996. この作品は、2002年にフィリップ・ノリスによって *Rabbit-Proof Fence* (邦題『裸足の1500マイル』) というタイトルで映画化された。

¹² 『マイ・ブレイス』の出版と合わせて、先住民文学の興隆を後押しした要素としては、入植200周年を記念した政府の事業計画と助成金によって、1987年、西オーストラリアのブルームに、アボリジナルとトレス海峡諸島民による初の先住民出版社マガバラ・ブックス (Magabara Books) が設立されたことを筆頭に、先住民の作品を取り巻く出版事情の変化があった。また、クィーンズランド大学出版が、先住民で初めて英語の書物『先住民伝説』 (*Native Legends*, 1929) を出版したディヴィッド・ユナイポン (David Unaipon) の名を冠した、先住民作家のための文学賞を設立したのが、1988年だったことも忘れてはならないだろう。ここにあげた自伝的作品の出版ラッシュは、こうした出版事情の変化が追い風になって起こったとも考えられる。

ここで注目したいのは、なぜこれほどまで多くの自伝が先住民（特に女性）によって書かれたのかということである。その一つの考察として、1980年代から世界的に広がったマイノリティの自伝的实践との連動性をあげることができるかもしれない。「自伝」(Autobiography)という用語は、ポスト啓蒙主義時代の造語であり、特権化された自己によって語られる個人と、その個人の唯一無二性を記録した物語を意味する。¹³この定義からも分かるように、ヨーロッパの自伝は、元来、強固な自己に基づいたものであった。ジョージ・ガストロフ (George Gusdorf) は、「自伝の条件と限界」 (“Conditions and Limits of Autobiography”) において、自伝がいかに西洋的で白人そして男性に独占されてきたジャンルであるかを指摘している。¹⁴しかし、自伝というジャンルをとりまく状況が、学術的分野の内外において劇的な変化を遂げたことは注目に値する。女性や有色の人々といったこれまで抑圧されてきたマイノリティ達が、主体性を確立するべく自伝を書くという実践に加わり始めたのである。自伝は性、民族、人種、宗教といった様々な差異をもつマイノリティが声をあげるための手段、さらには自己のイメージを形成し、受容し、拡散する重要な手段となっていたのである。

ジュリア・スウィンドル (Julia Swindells) は、この革新的な自伝の有効性について、次の引用のように述べている。

今や自伝は、個人のために、そして個人を超えて語る権利を創造しながら、抑圧された人々や文化的に追放（疎外）された人々のためのテキストとなりうる可能性をもっている。女性、黒人、労働者階級などの無力な立場に置かれた人々は、自伝、すなわち、一個人の声を超えて表される主張を通して、自らを文化の中に書き込み始め、その動きは広がりつつある。¹⁵

スウィンドルの主張によれば、周辺化されてきた人々にとって、自伝はその抑圧に抵抗する手段であり、文化的書き込みと承認を通して主体を構築する手段でもあるのだということができる。オーストラリアの文脈においても、自伝というジャンルは、性、民族、人種、宗教といった様々な差異を持つマイノリティ・グループにとって、声をあげるための重要な道具となっていた。ギリアン・ウィットロック (Gillian Whitlock) によれば、自伝を読むという行為は、オーストラリアのナショナル・アイデンティティを思索し、それを制限し確認する過程を内包しているといえる¹⁶。自伝が国家的神話やナショナル・アイデンティティを強化するよりどころとなると仮定するならば、アボリジナル作家による自伝は、オーストラリアのナショナル・アイデンティティについ

¹³ Gusdorf, George. “Conditions and Limits of Autobiography.” *Autobiography*. Ed. And Trans. James Olney. Princeton University Press, 1980, p.35.

¹⁴ Gusdorf, “Conditions and Limits of Autobiography,” p.31.

¹⁵ Swindells, Julia. *The Uses of Autobiography*. Taylor and Francis, 1995, p.7.

¹⁶ Whitlock, Gillian, ed. *Autographs: Contemporary Australian Autobiography*. University of Queensland Press, 1996, p. xix.

て再考を促す重要な力となりうるのだとウィットロックは指摘する¹⁷。このように、先住民の、特に女性による自伝が多数書かれた背景には、1980 年から 90 年代のマイノリティによる自伝的作品が、西洋の自伝的手法を修正しつつ、主体を形成する文学的实践となっていたことがあるといえるだろう。

2. 非先住民作家による「和解」の模索

1988 年を境に、非先住民系側からも「入植」の過去と先住民との関係、さらには自らの所属意識を問い直す試みがなされるようになった。入植 200 周年を祝った 1988 年からわずか 4 年後の 1992 年、オーストラリア連邦最高裁は、先住民の伝統的土地所有権を認知した。このいわゆる「マボ判決」の結果、新たに「先住権原法 (Native Title Act)」が翌 1993 年に成立することになり、この新法によって、「テラ・ヌリウス (無主の土地)」への「平和的な入植」という国家創設の神話は効力を失った。先住権原が認められたことで、非先住民系オーストラリア人、特にアングロ・ケルティック系の移民のオーストラリアという場所への帰属意識に変化が起こったことは想像に難くない。文学においても、そうした変化を反映するかの如く、セア・アステリー (Thea Astley)、ピーター・ケアリー (Peter Carey)、リチャード・フラナガン (Richard Flanagan)、ケイト・グレンヴィル (Kate Grenville)、ゲイル・ジョーンズ (Gail Jones)、ディヴィッド・マルーフ (David Malouf)、アンドリュー・マガン (Andrew MaGhan)、アレックス・ミラー (Alex Miller)、ローハン・ウィルソン (Rohan Wilson) といったオーストラリアを代表する作家たちによって、入植をめぐる歴史を題材とした小説が書かれている。

その顕著な例を示すものとして、ここではグレンヴィルの『闇の河』 (*The Secret River*) という作品を取り上げてみたい。¹⁸入植の歴史を取り上げた作品は多く書かれているなかで、『闇の河』は入植者による先住民の虐殺という歴史の暗部と本格的に向き合おうとした作品という意味で注目される。オーストラリア史における先住民の不在を初めて指摘した人類学者 W.E.H. スタナー (W.E.H. Stanner) は、「オーストラリアの歴史の闇には血の河が流れている」と述べ、語られてこなかった暴力的な入植の歴史を「オーストラリアの大いなる沈黙」と呼んだ。¹⁹グレンヴィルの『闇の河』は、このスタナーの言葉からタイトルと作品のインスピレーションを得た歴史小説である。本作はオーストラリア国内でベストセラーとなり、多くの賞を受賞、テレビドラマ化され、演劇にも翻案された。さらには、ヴィクトリア州や西オーストラリア州の中等教育、そしてシドニー大学をはじめとする高等教育のカリキュラムにも採用されている。

『闇の河』という作品を読み進めるにあたって、本作が書かれることになった社会的背景について述べておきたい。本作が書かれたのは、先住民との和解への道を開いたポール・キーティング政権から保守派のジョン・ハーワードへと政権が交代し、和解への流れが中断された時期であった。キーティング労働党政権下でまとめられた「盗まれた世代」をめぐる報告書は、歴代政府

¹⁷ Whitlock, *Autographs: Contemporary Australian Autobiography*, p.xxiii.

¹⁸ Grenville, Kate. *The Secret River*, Text Publishing, 2005. (邦訳 一谷智子『闇の河』現代企画室、2015 年。)

¹⁹ Stanner, W.E.H. *After the Dreaming*, Australian Broadcasting Commission, 1967.

の責任を追及し、同化政策の被害者たちへの公式謝罪と補償を勧告したにもかかわらず、ハワード政権はそれを受け入れなかった。このハワードの対応を巡って、オーストラリア国内では広範囲な論争が巻き起こり、2000年には何万人もの人々が先住民と非先住民系オーストラリア人の和解を求めてデモに参加するという運動に発展した。グレンヴィルも、シドニー・ハーバ・ブリッジで行われた和解のための行進に参加し、この作品の構想を得たという。²⁰行進に参加していた先住民女性の一人と目が合い、微笑みを交わしたグレンヴィルは、ふと、この女性の祖先と、自分の祖先が200年前に出会っていたかもしれないと想像する。「もしそうなら、彼らの出会いとはどのようなものであったのだろう」、そのような疑問に突き動かされるようにして、作家は自身の流刑囚であった祖先の歩みを辿り、さらにはアーカイヴの調査をもとに、聞き及んだ家族史には語られなかった歴史の闇へと足を踏み入れてゆく。

作品の執筆にあたり、グレンヴィルは、流刑囚から成功して地主となった祖先の土地を訪ね、その土地の先住民にも取材を重ねた。作品の創作過程を綴った回想録で、グレンヴィルは次のように述べている。

これまでの人生において、私はたった一種類のオーストラリアを生きていた。しかし、私は、これまでは見えなかったけれども、自分も確かにそこに生きていたのだといえるもう一つの国があったことに気がつき始めていた。私はワイズマン（グレンヴィルの祖先）土地を訪れた。もう一度そこを訪れる必要があったのだ。今度はアボリジニの人々の土地としてのその場所へ。²¹

この引用の言葉には、植民者（とその末裔）の帰属意識を問い直す姿勢が読み取れる。文学者アマンド・ジョンソン（Amanda Johnson）の言葉を借りるなら、『闇の河』は植民者による「共感ある脱領土化（“empathic deterritorialisation”）」によって書かれた作品であるということができるかもしれない²²。

本作がどのように先住民と非先住民の和解の問題に取り組んでいるのかについて論を進める前に、物語のあらすじを簡単に紹介しておこう。本作は、作家自身の祖先である人物をモデルにした主人公ウィリアム・ソーンヒルの視点から描かれる。18世紀末のロンドンの貧民街に生まれ育ち、テムズ河の舟頭となったソーンヒルは、貧しさから盗みを犯し、ニューサウスウェールズ植民地への流刑に処せられる。刑期を終えたソーンヒルは、シドニー西部を流れるホークス・ベリー河沿いに土地を手に入れるが、ソーンヒル岬と名付け、無人の未開地だと信じて疑わなかったその土地は、先住民が伝統的な暮らしを営む場所だった。近隣の開拓者と先住民の間の緊張関係が高まるなか、ついにソーンヒルは開拓者らによる先住民の虐殺に加担する。この虐殺の事実、

²⁰ Grenville, Kate. *Searching for the Secret River*, Text Publishing, 2006, p.13

²¹ Grenville, *Searching for the Secret River*, p.133.

²² Johnson, Amanda. “Empathic Deterritorialisation: Re-Mapping the Postcolonial Novel in Creative Writing Classrooms”, *JASAL* vol. 12, no. 1, 2012.

ソーンヒルの後の成功に暗い影を落とし続け、彼は記憶のなかを流れ続ける闇の河を抱えて生きてゆくこととなる。

文学者エレノア・コリンズ(Eleanor Collins)は、『闇の河』のプロットには、オーストラリア人にはお馴染みの建国神話、すなわち「微罪で流刑に処せられた受刑者」という初期の入植者を理想化する神話、そして「立派な開拓者となってゆく受刑者たち」さらには「危険な未開の土地で働く勇敢な叩き上げの男たち」という、いわゆる英雄像を提示する開拓者神話が見られることを指摘する。²³しかしここでは、そうした神話に加えて、開拓者と先住民の邂逅と接触を書き込むことで、『闇の河』がお馴染みの建国神話に再考を促す視点を含み込んでいることに注目してみたい。本作には、流刑に処せられるも、模範囚であり、やがては勤勉で穏健な開拓者となった主人公ソーンヒルが、先住民の虐殺に加わってゆく過程が詳細に描かれる。それは、貧しさに喘ぐイギリスの階級制度の犠牲者であった彼が、新天地で先住民を迫害する加害者へと変貌を遂げる過程でもある。『闇の河』は、「国家の基礎を築いた英雄」か、それとも「侵略者」かという二者択一を超えて、重層的な人間存在とその複雑性を提示しているといえるのである。

社会的に忘却されてきた先住民虐殺の事実から目をそらさずに、入植者の意識や加害の歴史を大胆に描き切ろうとする一方で、この作家にとって最大の課題であり、様々な試行錯誤があったのは、先住民をどう描くかという問題であったようだ。「先住民の人々の伝統的な営みを描くことや彼らの意識に入っていくことはできないし、それをするべきではない」と考えるグレンヴィルは、先住民の登場人物による発話を極力制限し、その不在自体が「それを説明するために用いるいかなる言葉よりも雄弁な異空間を作り出す」という逆説的な手法を用いて、風景描写を通して先住民の人々の声を表象しようとした。²⁴先住民を描く上でのグレンヴィルのこだわりは、次のような言葉にもあらわれている。

私はこの本をアボリジナルの人々の敗北で終わらせたくなかった。大地に関わる何かかがアボリジナルの人々は打ち負かされたのではないことを示唆するような短い場面を最後に入れたいと思っていた。²⁵

小説の終盤には、先住民の人々と土地の結びつきが最も端的に表現された印象的な場面がある。本作には、頭部に深い傷を負いながらも、開拓者たちによる虐殺事件を生き延び、ソーンヒルのものとなった土地の川べりに一人住まう「ジャック」と呼ばれる先住民が登場する。ソーンヒルはジャックに食べ物を与えようとするが、彼はソーンヒルの申し出を拒み、大地に手のひらを這わせ、拙い英語で「これ、私。私の場所」とつぶやく²⁶。たった独りでその地に留まり続け、土地と一体化したようなジャックの威厳に満ちた姿がえがかれるこの場面は、土地を剥奪された痛み

²³ Collins, Eleanor. "Poison in the Flour: Kate Grenville's *The Secret River*." Sue Kossew, ed., *Lighting Dark Places: Essays on Kate Grenville*, 2010, pp167-78.

²⁴ Grenville, *Searching for the Secret River*, p.199.

²⁵ Grenville, *Searching for the Secret River*, p.278.

²⁶ Grenville, *The Secret River*, p.344.

と同時に、奪われてもなおその地の守護者であり続ける先住民の存在を伝える。一方で、主人公ソーンヒルは自分にはジャックのような土地とのつながりがないという空虚さに襲われる。ソーンヒルは成功してすべてを手にするが、ジャックの手が土を撫でるのを見た時、自分にはジャックのように、「肉であり魂であるといえるような場所」すなわち「いつも変わらずそこに属しているのだという、純粋なつながりを感じる場所」がないことを感じ取っている。²⁷土地を得て成功者となったソーンヒルは、決して勝者たりえず、確固たる帰属意識を持つことができない。このソーンヒルの不安は、現代のオーストラリアで加害の過去との対峙に揺れ動く、いわゆる「白人」オーストラリア人の複雑な主体性を映し出しているともいえる。このように『闇の河』は、お馴染みの建国神話を脱構築することで、国家の自画像の再考を迫る視点を提示し、非先住民系オーストラリア人の帰属意識を問い直すことで、「和解」の出発点に立つ契機を与えたといえるのではないだろうか。

しかし、本作に向けられた批判もある。例えば、先住民歴史学者で作家でもあるジニー・リー（Jeanine Leane）は、本作を21世紀における「国家創生」物語への投資であり、「植民者アイデンティティの再形成の物語」なのだと指摘する。²⁸リーによれば、グレンヴィルは先住民自身の声を書くほどには知識がなかったので「空白」を作ったのであり、それは作者が批判を受けるリスクを減じているのだという。²⁹リーは、自分達の歴史をある目的をもって書くために先住民をコンテキストに埋め戻すのは「傲慢な行為」であり、「植民者の現在のために先住民の過去を媒体、リソースとして搾取している」のだとして、本作に厳しい批判を投げかけた。³⁰こうした先住民側からの批判や警戒心は、非先住民側から先住民との和解を目指す姿勢が表れはじめたとしても、両者が本当の意味で納得できる表象へ至る道のりは厳しい現実があることを物語っているといえるだろう。

3. 先住民文学の新たな展開

一方、近年の先住民文学の展開に目を向けると、「和解」を模索する新たな動向が生まれている。2010年に出版された先住民作家キム・スコット（Kim Scott）³¹の『ほら、死びとが、死びとが踊る』（*That Deadman Dance*）は、その好例といえるだろう³²。この作品は、一部の歴史家によって

²⁷ Grenville, *The Secret River*, p.431.

²⁸ Leane, Jeanine. “Tracking Our Country in Settler Literature”, *JASAL* vol.14 no.3, 2014, pp.1-17.

²⁹ Leane, “Tracking Our Country in Settler Literature”, p.14.

³⁰ Leane, “Tracking Our Country in Settler Literature”, p.12-15.

³¹ スコットは、1957年パースに生まれ、ヌンガーと呼ばれる先住民の人々をルーツにもつ作家であり、1999年に出版された『ベナン』（*Benang*, 1999）で、オーストラリア文学で最も優れた作品に贈られるマイルズ・フランクリン賞を先住民作家として初めて受賞し一躍注目を浴びた。『ほら、死びとが、死びとが踊る』でスコットは、2度目のマイルズ・フランクリン賞を受賞している。スコットは、作家として書く傍ら、カーティン大学のメディア・文化・創造芸術学部教授を務め、「ウィルロミン・ヌンガー Language and Stories Project」と呼ばれるヌンガーの言語と物語を中心とした先住民文化復興のプロジェクトのリーダーとしても活躍している。

³² Scott, Kim. *That Deadman Dance*, Picador, 2010.（邦訳 下楠昌哉訳 『ほら、死びとが、死びとが踊る—ヌンガルの少年ボビーの物語』、現代企画室、2017年。）

「友好的なフロンティア」と呼ばれる西オーストラリアのアルバニーを舞台に、19世紀初頭の入植初期におけるヌンガーの人々と入植者の邂逅を描いている。本作は、植民地時代の入植者の日記やヌンガーの人々と捕鯨産業との関わりを示した歴史書をはじめとする歴史的資料も創作のソースとして用いており、先住民の視点だけではなく、白人入植者の視点、さらにはクジラの視点からの語り、縦横に織り込まれた幻想的で多声的なテキストである。

本作を考察するにあたって注目したい点は、入植者とアボリジナルの文化的境界に立つことになった少年を主人公とし、また、最終的には疫病に見舞われ、土地と暮らしを奪われていく先住民コミュニティの受難を辿る一方で、西欧文化との出会いの中で変容しつつも豊かになってゆく先住民の言語や歌や踊りといった文化の混淆の過程が前景化される点である。著者による注釈で、スコットは次のように述べている。

この小説は、歴史によって「靈感を受けた」のだと言わせてもらおう。というのは、歴史的な出来事を物語ったり、私が特に興味をそそられたヌンガルの個人を書くよりはむしろ、彼らの自信、外からの物事を受け入れる度量や遊びの感覚、利用できるようになるやいなや新しい文化的な諸形態—言語や、唄、銃やボート—を自分たちのために使ってやろうとしていた心構えから、物語をつくりあがたかったのだ。彼らは、自分たち自身が征服するのが不可能な地霊の顕在であると信じたうえで、異文化交流における相互作用と微妙な差異を持つ価値を認めていたのである³³。

この引用が示すように、ヌンガーの西洋文化との最初の接触は、能動的かつ積極的な異文化交流への参入であったのであり、こうした歴史に触発されたスコットは「伝統」という言葉によって閉じたイメージをもたれがちな先住民文化の開放性や適応力、柔軟さを文学的想像力によって再現してみせたといえる。

『ほら、死びとが、死びとが踊る』という本作のタイトルも、先住民の人々には、死人が踊っているように見えたというイギリスの軍隊の仕草を真似た先住民の「踊り」から採られている。それはまさに先住民の人々が、入植者たちと邂逅の過程で、他者の存在を自分たちの文化に取り込もうとしたことを示している。小説の中心的語り手であるボビー・ワバランギニも、コミュニティに伝わるその踊りを刷新しつつ人々を魅了し、先住民と非先住民の異文化交流を促進するキーパーソンとして描かれている。ワバランギニという名前は「みんなで一緒に遊ぶ」という意味であり、唄や踊りといったパフォーマンスの才能に恵まれたボビーは、その名の如く、ヌンガーと入植者の両者に愛される存在として、二つの文化と人々の架け橋になってゆくのである。小説の冒頭には、そのことを象徴するように、異なる言葉と言葉、異なる文化と文化の間を行き来し、そこから生まれる新しい創造に喜びを覚えるボビーの姿が描かれる。

³³ Scott, Kim. *That Deadman Dance*, pp.436—437.

カヤ。

こういう言葉を書くと、ボビー・ワバランギンの顔はほころんでしまう。こんなふうにかいたひとは、だれもいない、と彼は思った。ぼくらの「はろー」とか「いえす」をこんなふうにした人は、今まで誰もいなかったんだ！³⁴

ここでは、同化政策によって先住民が背負うことになった重荷、すなわち先住民は「英語」を強制され、「声の文化」から「文字の文化」へ移行させられたのだという従来のイメージは覆される。同時に、自らを言祝ぐ無邪気なボビーのビジン英語は、「大文字の英語」を侵食し脱構築しながら、アルファベットを使って書かれたヌンガーの言葉と共に、二つの言葉と文化が融合する瞬間を伝えているといえるのではないだろうか。

本作には先住民側からだけでなく、入植者の側からも二つの文化の橋渡しの役割を担う人物が登場することも注目に値する。海軍の医師ドクター・クロスはその筆頭であり、ヌンガーの人々と積極的に交流し、互いのあいだにある溝を埋める努力をしながら、両文化が融合した「新世界誕生」を夢見ている。一例として、ドクター・クロスがヌンガーの相棒であるウニヤンと唄を歌い合うことでコミュニケーションを図る場面を見てみよう。

二人は、唄を歌い合った。ウニヤンが始めて、クロスが受けた。それはコミュニケーションの一方法だった。お互いで共有している語彙が限られていたので、ただ自分について話そうとするよりも、そうした方が多くを伝え合えた。クロスは、子どもの頃に覚えた曲を歌った。賛美歌にバラッド、オールド・ラング・ザインに下品な舟唄。にもかかわらず、レパートリーはすぐに尽きてしまった。それでもウニヤンは、何度も何度もそうした曲を熱心に聞こうとし、すぐにいっしょに歌うようになった³⁵。

こうして、クロスとウニヤンは次第に確かな信頼関係で結ばれるようになり、緊密な関係を構築してゆく。クロスは亡くなる時に、ウニヤンと同じ墓に埋葬されることを望み、「地中で溶け合う魂」となった二人は文化の共存と融合のシンボルのように映るのである。³⁶

しかし、ヌンガーと初期の入植者たちが育んだ友好的なフロンティアも長くは続かない。両者の対立が日増しに深まるなかで、ボビーは自らのパフォーマンスによってこの対立を回避しようと試みる。しかし、ボビーの渾身のパフォーマンスは、入植者はおろかヌンガーの人々の心さえも勝ち取ることはできない。彼のパフォーマンスを遮るように、突然、銃声が響き、ボビーの叔父であるメナクが白人によって銃殺された暗示とともに小説は幕を閉じる。

『ほら、死びとが、死びとが踊る』には、このエンディングののちに訪れる先住民への迫害と差別の歴史が、敢えて描かれない。これに対して、先住民が歩んだ歴史や現在も先住民が抱える問

³⁴ Scott, Kim. *That Deadman Dance*, p.5.

³⁵ Scott, Kim. *That Deadman Dance*, p.144.

³⁶ Scott, Kim. *That Deadman Dance*, p.350.

題を直視していないという批判的があるかもしれない。しかし、作家、表現者としてのスコット意図は別のところにあるのではないだろうか。この作家がこの作品で目指したことのひとつは、先住民の表象はもはや被害者というカテゴリーにとどまるものではなく、先住民の人々への「新しいイメージ」を提示することであったように思われるのである。主人公ボビーの柔軟な異文化への適応力とあらたな文化の創造力、そして彼の痛快極まる活躍は、まさに新しい先住民像だといえる。さらに、もうひとつ、スコットが本作を通して試みたのは、「異文化交流における相互作用と微妙な差異が持つ価値」に目を向けることによって、信頼と友情を育むことができた二つの文化の出会いの瞬間を想起し、実現しなかった歴史の続きを紡ぎ直す地平へと読者を誘うことであったのではないだろうか。行政が掲げる「和解」という政治的クリシェを超えて、オーストラリアという「土地」に属することに対する先住民的価値観が共有され得るとき、真の「和解」は実現するのだということを、そしてそれは同時にオーストラリアの脱植民地化にも通じることをこの作品は示しているように思える。

先住民文学研究を牽引してきたアン・ブリュースター(*Anne Brewster*)との対話のなかで、「先住民と非先住民の和解への思い」を聞かれたスコットは、「決して不可能ではない」と述べ、「それがブランド化されたり、感傷的に語られることは避けられるべきだと前置きしたうえで、対話は続けられるべきだし、先住民と非先住民が歴史認識において一致するために互いに担える役割はあり、そのための異文化間の交流を続けることが必要」だと語っている。³⁷そして、小説家としての自らの役割を先住民と非先住民を含めた「すべての者を癒す回復のナラティブ (a recovery narrative which is to do with healing for all of us)」を紡ぐことだとも述べている。³⁸こうした言葉と姿勢に鑑みれば、グレンヴィルの『闇の河』とともに、スコットの『ほら、死びとが、死びとが踊る』は、先住民と非先住民をめぐる「和解の文学」30年における一つの到達点を示しているといえるのではないかと思われる。

おわりに

本稿では、入植 200 年を迎えた 1988 年以降の先住民と非先住民文学が、入植の歴史や両者の関係性を多元的に検証し、表象している様を考察した。この 30 年間で入植の歴史に対するオーストラリアの社会的認識は変容し、文学にはそうした変化が如実にあらわれているといえる。ここで見たように、作家たちは、複雑さを排除し、価値や文化の多様性を隠蔽するような過去の記憶や表象に抗いながら、歴史を再構築するナラティブを紡ぎだそうとしてきた。グレンヴィルやスコットの小説が示唆するように、衝突と虐殺が繰り返された入植の歴史を認知することを経て、先住民と非先住民の人々の出会い直しは果たして可能なのか、この問いへの安易な答えは用意されてはいない。また、本論では触れることができなかったが、非先住民による先住民表象の在り方

³⁷ Brewster, Anne. *Giving This Country A Memory: Contemporary Aboriginal Voices of Australia*, Cambria Press, 2015, p.21.

³⁸ Scott, Kim. "Indigenous Author Wins Miles Franklin Award," interview by Tony Eastley, *ABC Radio* (23 June 2011), <http://www.abc.net.au/am/content/2011/s325109.htm> (accessed 3 March 2018).

とその受容をめぐる問題をはじめとして、依然として多くの課題は残されている。しかし、先住民の作家や研究者の登場とともに、そうした課題が提示され、共有される土壌が徐々に形成されようとしていることは見逃されるべきではない。さらに「先住民と非先住民の和解」というとき、それはアングロ＝ケルテック系の入植者の末裔と先住民系のオーストラリア人の関係性に限定されがちであるが、多民族国家であるオーストラリアにおける多様な出自を持つ移民が、植民地主義の歴史とどのように向き合い、アボリジナルの人々の存在を承認しつつ、先住の民の土地にどのように属していくのかという問題も同時に議論されるべきである。歴史の再検証、新たな先住民像の創造、先住民と非先住民の関係性の再構築に向けた文学の挑戦は、これからこそ、その真価が問われてゆくことになるだろう。

＊本稿は、『オーストラリア研究』（第32号、2019年）に掲載された論文に加筆修正を施したものである。